

福山大学 大学教育センター 大学教育論叢
創刊号（2014年度） 2015年3月発行

インドネシア地方都市における漢語教育

大塚 豊

インドネシア地方都市における漢語教育

大塚 豊*

Chinese Language Education in Indonesian Local Cities

Yutaka OTSUKA*

ABSTRACT

Overseas Chinese and ethnic Chinese in Indonesia have experienced a harsh and oppressed history. In the latter half of the 1960s, when the Chinese language was officially forbidden to use and all Chinese schools were closed, a long blank period of the language continued until the 1990's in Indonesia. Even after entering this century, riots against the ethnic Chinese occasionally occurred and the flash point of racial confrontation has not necessarily gone out completely. However, according to improved relations with China on the stage of international politics and activation of economic exchange between two countries, it is certain that circumstances surrounding ethnic Chinese as well as Chinese language in Indonesia has become different from the past. Based on the result of field surveys in some cities of the central and eastern parts of Java, this paper considers what has taken place in Chinese language education in Indonesia.

キーワード：華僑・華人、漢語教育、インドネシア、民族、アイデンティティ

1. はじめに

前世紀末の1998年5月、スハルト政権末期に同政権への批判と華人政商や広く一般に華人住民への根強い反感から、メダン、ジャカルタ、中部ジャワのソロを中心に、反華人暴動が起き、華人経営の商店やショッピングセンターの焼き討ち、女性への暴行事件などが続け様に発生し、多くの犠牲者が出たことは未だ記憶に新しい。人口比では全体の2~3%とマイノリティーでありながら、インドネシアにおいて「経済的に強力で、インドネシアの商業的中産階級を形成し、経済エリート¹⁾」であると言われる華人は、ともすれば民族的憤懣のはけ口となってきた。「インドネシア土着のマジョリティであるプリブミ (Pribumi) 住民の不信感や怒り、あるいは嫉妬心を煽り、それゆえことあるごとに彼らは暴動や略奪の標的にされてしまうのだ²⁾」とされる。古くはオランダによる植民地時代の1740年にも華僑(中国の国籍を保持したまま海外に定住する者)・華人(移住先の国籍を取得した中国系住民)に対する虐殺事件が起こっており、日本占領下の1942年には華僑や抗日組織に対する弾圧が行われた。戦後、スカルノ体制期には共産党勢力が反植民地闘争の旗印を掲げ、インドネシア政府は急速に中国への接近を図ったが、同政権の瓦解につながった1965年の「9月30日事件」でも、反共思想の下で多くの大陸系華人が犠牲となった。その後の反華人的風土の中で、華語に対する風当たりは当然厳しく、60年代後半以降、実に30年にわたり華語・漢語は圧殺され禁止されて、長い空白の期

*大学教育センター教授

間が存在した。その後、今世紀に入ってから、2006年5月にはスラウェシ島のマカッサル市で華人排斥の運動が起こったし、2010年7月にも西カリマンタン州サンバス県では反華人暴動が起こっている。つまり、民族対立の火種は決して消えたわけではなく、依然としてくすぶり続けていると言っても過言ではない。しかしながら、国際政治の舞台での大陸中国との関係改善や経済交流の活性化の中で、華人やその言語である華語・漢語に対するインドネシア国内での動きには確かに従来とは異なる状況が見られるのも事実である。小論では、ジャワ島中部・東部の都市における現地調査の結果も踏まえながら、インドネシアで華語ないし漢語（文脈により、ほぼ同義の「中国語」の呼称も使用）に対して起こっている新たな動きについて考察してみることとしたい。その際、中国政府が展開する対外的な言語教育政策との関係に注意を払うこととする。

2. インドネシア華語・漢語教育発展略史

インドネシアにおける華語教育の歴史は遠く遡ることができ、1690年にはヴァタビア（現ジャカルタ）に華僑が初めての華語私塾である明誠書院を開いたのが、その嚆矢とされる。その後、華語を教授用語とする伝統的な私塾が各地に開かれた。教えられた内容は四書五経であり、福建や広東出身の華人商人が開いたものであり、教員も福建語や広東語を用いて教えた³。19世紀末になると新式の華語学校が出現するようになった。1899年当時、オランダ領東インドのジャワ島やスマトラ島には華語私塾が217あり、学ぶ者は4,452人であったし、その他の島にも私塾152があり、2,170人が学んでいたと記録されている⁴。中国国内の近代化運動である「変法維新運動」の影響を受けて、海外華僑は次々と近代的な華語学校を創設した。20世紀に入り、1901年3月17日にはインドネシアの華僑が創設した近代的な学校の先駆けである巴城（ヴァタビア）中華会館中華学校の設置を見た。1906年には中華總會（翌1907年にジャワ学務總會と改称）が創られ、同会はインドネシア全土における華語教育を統括する組織として機能した。近代学校は上述した私塾と異なり、華語や歴史の他に、算数、地理、英語、体操など近代科目を教えるようになった。教授用語も福建語や広東語ではなく、「国語」「マンダリン」などと呼ばれ、北京語を基本とする標準中国語に変わっていった。1902年にはヴァタビア中華学校に初めての女子クラスが置かれた⁵。華語教育、華字新聞、華僑団体は華人社会にとっての「三宝」あるいは「三大支柱」と呼ばれていたが⁶、そのうち華語教育は華人社会の存在と発展にとってとりわけ重要な役割を果たした。中国大陸での辛亥革命により1912年に中華民国が成立したことで、海外華僑の民族意識の高揚を生み、それに伴って華語学習の意欲も高まり、1911年に130校余りであった華僑学校は、1919年に250校（教員600人、在籍者1万5,948人）、1926年に507校（教員1,092人、在籍者3万2,668人）に増えたという⁷。

この時期、清朝政府および民国政府は血統主義の立場にたって、海外に居住する華僑やその末裔はどこで生まれた者であれ、中国公民として認定し、国に忠誠を誓い、中華文化を継承することを求めた。従って、歴代政府はいずれも海外在住の華人・華僑の教育問題を重視し、相応の措置を講じ、海外における華語教育の発展を支援してきたのである⁸。しかしながら、やがてオランダ植民地政府による圧迫や戦火の下で華語教育は衰退した。1931年の柳条湖事件以後、日本による中国侵略があからさまになるにつれ、東南アジア各地の華僑・華人による反日・抗日運動が高まりを見せ、とくに華語学校の中にはその中心的役割を担うところが少なくなかった。無用の混乱を恐れた各地の政府は華語学校に対する管理ないし取締を強化した。第二次大戦前の東南アジアに置かれた華語学校は制度やカリキュラム、教科書の内容、教育思想などの面でいずれも中国国内の同類の学校と類似していた。1935年にはシンガポールに出版社の南洋書局が創られ、東南アジアの華語教育関係の教材の出版を一手に引き受けることになった。これらの教材は基本的に中国国内の教科書をもとに作られたものであり、部分的に東南アジアに適した内容を付け加えたものであった⁹。1950年代中期以前には華語学校の卒業生の進路はかなり広く、当該地で華人のビジネス界で働くか、華語学校の教員となるか、中国へ帰国して進学あるいは祖国のために働くか、欧米へ留学するかといった選択肢があった¹⁰。

独立後の新政権の華語教育に対する寛容な政策の下で、華語教育は再び興隆する兆しが見えた。多

くの新興独立国の政府は中国政府や華僑の好感を得るために、華語学校への支援を惜しまなかった。インドネシア政府もその例外ではなく、1950年以前には華語学校に対して財政支援を行っていた¹¹。しかしながら、華語教育の余りの隆盛に懸念を示したスカルノ政権はやがて華語学校に対する各種の制限を加えるようになっていった。すなわち、華語学校の新設を禁止し、インドネシア国籍の学生・生徒が華語学校に通うことを禁止し、華語学校の設置区域に制限を設けた。イデオロギー論争が激しかった冷戦時代のことであり、華語ないし中国語は共産主義の言語だと見なされ、中国と密接な関係にあった伝統的華語教育は共産主義の伝播と結び付けて考えられ、反中国、反共の勢力により敵視されることになったものである。

一方、1955年に中国政府はそれまでの血統主義に基づく国籍法を正式に放棄し、二重国籍に反対する態度を明確にした¹²。これ以後、華僑は国籍を変更し、当該国の国籍をもつ華人となっていった。これまでに全体の約90%にあたる華僑が外国国籍を持つようになった。1957年以後、中国政府は華語学校に対する政策も変更した。華僑は居住する国に目を向け、当該国で勉学を続けることとし、華僑学生が帰国をする必要はなく、当該国に長期にわたりとどまるようにと要求するようになった¹³。こうした中国政府の国籍政策の転換をはじめとする種々の原因から、華語教育は海外華人の子女を引きつける力を失っていった。

1958年にはスマトラやスラウェシで地域的な反乱が起こったが、同年10月に台湾政府がインドネシア反政府集団を支持したことから、台湾との距離を置き大陸寄りの政治的立場をとっていたスカルノ政権は台湾系の華語学校も取り締まり、華語学校は一気に半減した。1957年当時、インドネシア全土に2000校近くの華語教育機関が存在し、42万5000人が学んでいたというが、1958年には華語学校の数は850校に激減し、在籍者も15万人まで減少した¹⁴。

「9月30日事件」から1年間後の1966年、インドネシア政府は全ての華語学校を閉校にした。スカルノに代わって政権の座に就いたスハルト政権の下で、華語教育はさらに深刻な局面を迎えることになった。スハルトは華人に対するインドネシアへの同化政策を徹底して推進し、華語の使用を禁止し、華語学校を閉鎖した。1968年には「大統領令第12号」によって、華人学生が教育機会を失うことへの対策として「特殊計画国民学校」の例外的な設置を許可して華人子弟を受け入れたが、ここではインドネシア人による管理が行われ、わずかに選択科目として漢語の学習が認められただけであり、以前に存在した華語学校とは本質的に異なるものであった。こうしたわずかに認められていた華語学習の機会も1974年に過渡的措置としての「特殊計画国民学校」の終了が宣言されると、華人子女にとって華語学習の機会は完全に消滅することになった。1974年3月には改めて華語学校の全てが廃校になり、一律に私立国民学校に改変され、華語の授業は一切取り除かれた¹⁵。かくして30年の時間の経過の中で、40歳以下の華人は基本的に華語を理解しない状況が生まれてしまったのである¹⁶。

インドネシア政府による華語圧殺の政策が転機を迎えたのは1990年代に入ってからである。1990年、インドネシアは中国との国交を正常化した。インドネシア政府はまず華語学校や華文出版物の禁令を解き、台湾からのビジネスマンが彼らの子女のために学校を開くことと、漢語教科書および漢語で書かれた機械説明書のインドネシア国内への持ち込みを許可した。1994年にはダルマ・プルサダ大学が必修科目としての漢語を開設することを認め、同年8月には、華語使用を禁じてきたこれまでの政策の見直しを宣言した。これにより、華語を解する旅行者のために、さまざまな場所で華語による資料を提供することが行われるようになり、華人旅行者のための観光ガイド養成を目的とした華語補習クラスのようなものが創られるようになった。

ワヒド大統領の政権下で華語への理解や寛容度はいっそう増した。彼は民族平等と文化の多元化政策を取り、対華人政策の大幅な見直しを行い、華人蔑視の情勢を基本的に改めた。華語ないし漢語に対しては、貿易・経済振興の重要な手段と見なし、積極的に漢語教育を推進していく方針を明らかにした。その具体的な措置は以下のとおりである。

第一に、漢語出版物や漢語による読み物の輸入制限を取り除いた。その結果、華字新聞や漢語放送が増加傾向にある。華字新聞としては、『印度尼西亞日報』『国際日報』『世界日報』『和平日報』『印度

『ニ西亞商報』『新生報』(以上、ジャカルタ発行)、『千島日報』『誠報』(スマラン発行)『華商報』『印広日報』(メダン発行)があり、雑誌には『印尼與東協』『呼声』『印尼文友』『拓荒』『南風』がある。またジャカルタには漢語テレビ局・ラジオ局もある¹⁷。

第二に、漢語(中国語)を国民教育体系の中に採り入れ、各教育段階の学校が漢語の授業やコースを設けることを許可し、漢語を初等・中等学校の第二外国語として教え、英語や日本語と同様の位置づけを与えることを認めた。2004年～2007年の間に、全国の8,039校の中等学校では高校2、3年次に中国語が選択科目として徐々に開設されることになり、2005年の時点で、すでに1,000校近い学校が正式に開設していた¹⁸。

第三に、中国政府が推進する中国語能力検定試験、いわゆるHSK(漢語水平考試)の実施を許可した。第一回のHSK試験は2001年10月27日と28日にジャカルタ(受験者609人)、スラバヤ(受験者272人)、メダン(受験者165人)、バンドン(受験者152人)の各地で実施され、合計1,198人が受験した¹⁹。それまでHSK受験希望者はシンガポールやマレーシアまで赴いて受験しなければならなかったのである。HSK試験の実施地は2010年までに8都市に増え、受験者も7,880人に増えている²⁰。

第四に、教育省内の成人教育および青年・体育局と校外教育司が「華語補習クラス総合調整処」という部門を設置し、全国の数百か所の華語補習学校の統括調整を行い統一的な教材を編纂する機関とした²¹。

第五に、華語・漢語教員の養成・訓練を強化し、中国から専門家を招聘してインドネシア人漢語教員の養成・訓練を行う一方、インドネシア人漢語教員を中国の北京、広州などに送って漢語のレベルアップを図った。第一期の漢語教員研修クラスは2001年3～6月にジャカルタ、スラバヤ、メダン、バンドンの各地で開催され、合計で1,025人のインドネシア人が受講した。広東から派遣された漢語専門家からなる講師団は4地点で5期の講習会を開催したが、いずれも募集定員を上回る受講希望者が集まり、例えばメダンでは180人の定員に対して600人近い希望者が集まった。講師団がどうにか受け入れることができたのは297人であったという²²。

第六に、積極的に漢語教材の編纂に取り組み、その過程では中国から専門家を招聘している。その他、インドネシア政府は中国教育部に対して漢語教育顧問1名の派遣を要請し、ジャカルタに常駐してインドネシア教育省と協力して漢語教育の推進にあたることになった²³。

このようなインドネシア政府の積極的な漢語教育推進策の下、インドネシアでは漢語学習に対するブームともいえるべき現象が起きており、各段階の教育機関では漢語の授業やコースの開設が相次いでいる。大学に関しては、上述したジャカルタのダルマ・プルサダ大学の他、インドネシア大学、トリサクティ大学、ジョグジャカルタのガジャマダ大学、メダンの北スマトラ大学、ウジュンパンダンのハサヌディン大学、スラバヤのウィドヤ・カルティカ大学、バンドンのマラナタキリスト教大学などが、中国語学科をすでに開設するか開設の準備を行っている。初等・中等教育段階でも多くの学校が中国語を授業科目に採り入れており、西カリマンタン、リアウ、ジャンビ、バリなどの地区では漢語が小中学校の必修科目に位置付けられている。各種の漢語補習クラスのようなものは枚挙に遑がなく、華人家庭300世帯が住む東ジャワのバーレー村では2001年1月に漢語補習クラスが開かれると、すぐに200人余りが通うようになったという²⁴。

さらに、中国政府の対外中国語・中国文化普及政策の一環として、世界の各地で展開されてきた「孔子学院」の開設に関して、インドネシアもその例外ではない。2010年6月28日に両国の国交樹立60周年を記念する教育文化交流促進を目的として、スラバヤ国立大学、マランのマラン国立大学、カリマンタンのタンジュンプラ大学、ジャカルタのアリ・アズハル大学、バンドンのマラナタキリスト教大学、マカッサルのハサヌディン大学の6校に開設された。「それらの6大学では『孔子学院』とは呼ばずに、『中国語センター(Pusat Bahasa Mandarin)』という名称である²⁵」とされるが、孔子学院の中国側統括機関である漢辦のデータには明確に各大学名の後に「孔子学院」と記され、それぞれ華中師範大学、広西師範大学、広西民族大学、福建師範大学、河北師範大学、南昌大学が中国側の

協定校になっている²⁶。

3. インドネシアにおける漢語教育の復活原因

以上述べてきた漢語の隆盛ないし漢語教育ブームの背景として、以下のような原因が考えられる。

(1) 漢語教育の質的転換と漢語の価値の増大

伝統的漢語教育は、海外の華僑・華人が中華文化と民族のアイデンティティを守るため出資し、創設し管理した居住国の制度の枠外に位置する独立した教育体系であった。伝統的漢語教育は華僑・華人の子女を育成するだけでなく、さらに政治、経済、文化など多方面の機能を持っていた。そうした教育は中国国内の情勢の影響を深く受けるため、一定の規模と程度まで発展した後、インドネシアにおいては主権の独立、政治的安定、さらには民族的団結にとって脅威となると考えられ、政府により抑圧されることが起こった。こうした伝統的華語教育や華僑・華人のための教育と比べて、近年復活したインドネシアの漢語教育の性質には大きな変化が生じている。現在のインドネシアの漢語教育はすでにインドネシアの国民教育体系の中に組み入れられており、さらに多いのは補習クラスあるいは選択科目として教えられるものである。インドネシアの漢語教育はすでにかつてのような華僑教育としての特徴を有さず、インドネシアの国民教育体系の下、教育と文化の多元主義政策の一環として展開される文化・教育実践となっている。華語教育の内容から形式にいたるまで一変したことにより、インドネシア政府および社会の華語教育に対する猜疑心は取り除かれ、漢語教育の復活と発展を促した。

また、漢語は英語と並んで世界で最も多くの人々によって使用される言語の1つであることに加えて、華人は世界各国に広く分布していることから、国際語になる条件を備えている。他方、中国の改革開放政策の下で、中国経済は目覚ましい発展を遂げ、中国の世界におけるプレゼンスの増大とともに、漢語の実用価値が大いに高まった。インドネシアの漢語教育の復活はまさにこうした背景の下で起こったものである。「インドネシアにおいて中国語のコースが今や大いに盛況であるのは、経済的パワーが西洋から中国へ移った姿を人々が認識しているからだ²⁷」とされる。

(2) 国際環境の変化

冷戦の終結後、イデオロギー論争は影をひそめ、これに代わって台頭した文化多元主義の論調がさまざまな文化の優れた点を肯定的に捉え、各種の文化の共存が社会の発展にとって有利であると考えられるようになる中で、そうしたものの一つとしての漢語教育の復活を理論的に支えることになった。こうした傾向の影響を受け、ますます多くのインドネシア人が華人や彼らの文化を評価し、インドネシアの社会の中での華人の地位を肯定的に捉えるようになった。一方、かつて華人の側に見られた「華語教育がなければ、華人の社会も存在しない」とか、「華語教育は民族文化を保持する教育の体系である」といったイデオロギー色の強い考え方は弱まった。かつてイデオロギー論争が激しかった冷戦時代には、華語ないし漢語は社会主義の言語だと見なされ、中国と密接な関係にあった伝統的華語教育は共産主義の伝播と結び付けて考えられ、反中国、反共の勢力による抑圧を受けることになった。

さらに冷戦終結後に起こった経済のグローバル化は急激な発展を遂げ、世界経済の一体化が次第に進み、経済面での国際交流は空前の活況を見せ、政治、文化などの多方面の国際交流を促した。インドネシアも決してその例外でなかった。国際交流は日増しに増大し、とりわけ 90 年代末に起こったアジアの金融危機以後、インドネシアは華人資本と華人観光客を引きつけることが緊急に必要なとの認識から、漢語を理解する多くの人材に対する必要性を認めざるを得なかった。しかし、長年にわたる漢語ないし華語教育禁止策により漢語を理解する人材の養成はまったく途絶えていた。

中国とインドネシアの外交関係の改善は、インドネシアの漢語教育の復活にとっての障害を取り除いた。ワヒド大統領とメガワティ大統領が相前後して中国を訪問し、中国の朱榕基首相も 2001 年 11 月にインドネシアを訪問して、両国間で一連の経済文化協定が締結された。さらに 2001 年 11 月、中

国とアセアンの 10 か国はプノンペンで「中国・アセアン全面経済協力の枠組み合意」に署名して、2010年に中国とアセアン国家の自由貿易区を作ることを決定した。こうした状況の下では、華人と漢語教育の問題は両国関係にとっての障害などではなくなり、むしろ両国の友好的往来を強化する機能を果たすものであると考えられるようになった。

(3) インドネシア国内の環境の変化

スハルト時代に同化政策が強行された結果、インドネシアの華人社会には大きな変化が生じた。ほとんど全ての華僑はインドネシア国籍を取得し、しかも政治、経済、文化など方面で全面的にインドネシアを自らの祖国と見なし、若い世代のインドネシア華人はほぼ中国語を解すことがなくなり、華人の伝統的信仰を放棄してキリスト教あるいはイスラム教に改宗し、ほぼインドネシア社会にとけ込んでいる。こうした状況は漢語教育に対するインドネシア当局の猜疑心を取り除いた。同化政策はインドネシア華人の同化過程を加速化したが、同時に深刻な民族矛盾をもたらした。インドネシア華人は政治、経済、文化などの社会生活の面で差別を受け、スハルト政権の末期にはしばしば反華人騒乱が発生して、インドネシア社会の安定と経済の発展に悪影響を及ぼし、インドネシアの国際的イメージを損なった。従って、文化多元主義政策の推進は起こるべくして起こったといえる。この他、インドネシアの民主化の発展も漢語教育の復活を促した。スハルト時代の同化政策は明らかにマイノリティーである華人に対する民族差別の色彩を有するものであり、インドネシアの民主化と文化多元主義政策の登場により、華人に対して政治、経済、文化の平等な権利が与えられることになった。但し、人口比率としては約 3%のマイノリティーとは言ってもインドネシアの華人は人数に換算すると 700 万人以上²⁸であり、華語に対する潜在的な需要はきわめて大きい。

4. 漢語教育の実態

華語・漢語抑圧から解禁へと政策の転換が図られた後、インドネシアでは漢語学習への関心が高まりを見せ、漢語学習者の数が増大している。インドネシアにおける華語・漢語学習の場所ないし形態としては、①家庭教師による指導、②補習班や補習学校、③正規の幼稚園・小中高校、④大学の 4 つがある。家庭教師というのは教師の自宅、あるいは学習者の家などで教えるもので、学習者の数は 4、5 人の少数のものから数十人にのぼるものまでである。補習クラスは何らかの社会的組織が運営し、通常 2 人以上の教員を雇用し、2 つ以上のクラスを設けている。代表的な補習クラスとしては、ジャカルタの東方語言文化センター、現代語言センター、ヌサンダラ漢語補導センターがある。こうした補習クラス・補習学校の数については、ジャカルタ 11、タンゲラン 13、ボゴール 1、バンドンおよび西ジャワ 15、スマラン 22、東ジャワおよびその他の地区 18、中部ジャワ 6、バリ 4、カリマンタンやスラウェシの各地 7、メダン 4、ジャンビ 2 の計 103 という統計がある²⁹。これらの補習クラスや補習学校の中には政府に登録して許可証をもらっているものや、ランゲージ・スクールとしてインドネシア語、英語、中国語あるいは日本語のトリリンガル学校として運営されているものもある。バンドンの華都東方語言補習班、メダンの国際教育センターがその例である。正規の学校で華語・漢語が開設される場合には、①キリスト教教会が運営する私立学校、②華人が自ら運営するジャカルタの純潔学校、スマランのマダラ (MADALA) 学校など、③インターナショナルスクールあるいは台湾のビジネスマン子女のための学校の 3 種類に分けられるという³⁰。

このように、今や発展の兆しが見えるインドネシアにおける漢語学習であるが、実際のところ、漢語を学んでいる児童・生徒は一体いかなる環境の下、またどういう意識をもって漢語学習に取り組んでいるのであろうか。この点に関心を持ち、筆者は数年前から現地調査を実施してきた。調査地域として選んだのは、華人系住民が多く、漢語学習も進んでいると言われるジャワ島中部および東部の地域である。2010年8月末から9月初めにかけて、スマラン市およびサラティガ市、また、2012年9月半ばにはジョグジャカルタ市を訪れ、後掲の小・中・高各教育段階のいくつかの学校における漢語教育の実際を訪問調査するとともに、児童・生徒の意識を明らかにするために、各校関係者の協力を

得て質問紙調査を実施した。さらに、2013年12月にはスラバヤ市の小中高校で質問紙調査を実施した。

ここではまず、実際に授業の展開を観察するとともに関係者への聞き取りを行ったスマラン市、サラティガ市、ジョグジャカルタ市の小中高校を事例として、インドネシアの初等・中等学校における中国語ないし漢語教育を実施している学校の実情を述べておく。なお、文中の個人名は関係者の承認を得た上で使用している。

1) スマラン市テレシアナ (Theresiana) 校

小学校部から高校部までを擁する同校は、スマラン市のほぼ中心街に位置する私立学校であり、小学校部から高校部までを擁する大規模校である。今回の調査の主な対象であった高校部分だけに絞ると、高一から高三までの生徒数 375 人に対して、教員は 42 人である。自然科学、社会科学、言語の 3 学科が設けられている。授業料はコースの内容によって年額 70 万ルピア～30 万ルピアまで分かれており、平均すると 40 万ルピア (約 13 万円) である。学校を運営する法人 (yayasan) は貧しい家庭の子どもおよび成績優秀な子どもに対して奨学金を提供している。カリキュラムは基本的に国が定めたナショナル・カリキュラム³¹⁾に準拠している。卒業生の 95%が大学に進む進学校である。教授用語は国語であるインドネシア語であるが、英語で教える immersion program と呼ばれるコースも設けられており、約 100 人の生徒が同プログラムで学んでいる。生徒の間ではキリスト教徒が大多数であり、とくにカトリック信者がほとんどである。民族的には華人系が 95%を占めている。そのために、1 年次から漢語が全員必修となっている。インドネシアの学校は最近、学校のランクを示す指標として「国際的」(international)「国家的」(national)「地方的」(local) の 3 段階に区分しているが、この学校の場合には、最上位の「国際的」学校として認定された。

2) サラティガ市 (SMA Negeri 1) 国立第一高校

1958 年創設の同校は、2012 年時点で 1,150 人の生徒が在籍し、100 人余りの専任教員が教えていた。中国語担当の周秀玲教諭は 2003 年から 6 年間同校で教壇に立っている。もともと華人である周氏は、高校生の時に学習塾に相当する「補習班」で漢語を学んだことがあったが、その時には声調を正確に学ぶことはなかった。サティヤワチャナキリスト教大学の学士課程で英語を専攻し卒業した後、上海の華東師範大学に 2001 年～2002 年にかけて 1 年間留学し、中国語を専門に学んだ。帰国後の 2003 年にちょうどサラティガ市で最初に中国語の授業を開設することになった同校に教員として採用されたのである。サラティガ市ではその 2、3 年後から他の学校でも中国語を教えるようになった。この学校では、外国語としては英語が必修である他、第二外国語の選択科目としてドイツ語、日本語、中国語が開設されている。また、言語関係の科目として国語であるインドネシア語はもちろんのこと、地方語のジャワ語も選択して学ぶことができる。周氏は中国国家漢辦規画教材に指定されている劉洵編『新实用漢語課本』(北京語言語大学出版社刊)を教材として使っている。教育行政部門による教科書の指定はないが、各学年で学習すべき内容についてのシラバスないし基準は示されている。その内容は、1 年次には当該原語で挨拶ができること、家庭や学校での生活に関する問答、2 年次には自分の趣味についての説明、病院や銀行での必要な会話ができることといった目標の記述がなされているものである。教員はこれらの内容を教えるのに相応しいと思われる教科書を自主的に選んで教えている。週当たりの中国語の授業時数は 2 限である。金曜日を除く月曜から土曜までの 1 単位時間は 45 分である (金曜日は礼拝日に当たるため、40 分の短縮授業で早く授業を終わることになっている)。指導方針として、高校では基礎を学び、卒業後に関心に応じてさらに高度な中国語を引き続き学ぶことができるようにすることが目指されている。2 年次および 3 年次には自然科学、言語、社会科学の 3 専攻に分かれることになっており、言語専攻に属した者は 1 週間に 6 時間のドイツ語、日本語ないし中国語を学ぶことになる。これらの外国語については、他の科目のように卒業試験が課されることなく、正式の資格としては認定されない。従って、外国語を選択した者は単に知識を拓げる意味で漢

語やドイツ語を学んでいるのであって、レベルはそれほど高いものではない。しかし、生徒は近年の中国の発展ぶりに大いに刺激されており、両国関係の好転も相俟って、中国に対する関心、中国語に対する関心が高まっている。中国語の知識があると就職にも有利である。

3) サラティガ市キリスト教第一高校 (SMA KRISTEN I)

1951年創設の同高校は、2012年時点で583人の生徒を40人の専任・兼任の教員が教えていた私立学校である。キリスト教学校とはいっても、生徒の40%はムスリムである。同校は卒業生の75～85%が大学に進学する進学校であり、サラティガ市ではエリート校の1つである。施設・設備も政府立の公立学校に比べて一見して整っていることが分かる。授業料は月額が17万5,000ルピア～20万ルピアであり、親の経済状況に応じて、裕福な家庭の子どもは多く支払い、そうでない家庭出身は授業料を相対的に安く抑える方針が採られている。授業料の額は政府立の公立校とほぼ同様である。公立校の場合、政府からの予算が配分され、施設の改善や教員の給与などが賄われるが、経費が不足するため授業料の徴収が行われている。しかし、一般論として経費の使い道は余り明確ではなく、不正が発生する余地がある。

中国語教員として勤務する前出の周秀玲氏は非常勤教員として同校に勤務している。華人である彼女の66歳の母親は1950年代前半に当時存在した華語学校で学び、当時は余り声調の指導が厳密でなかったために、声調は正確ではないが、北京語でのコミュニケーションが可能である。周氏は留学から帰国後、サティヤワチャナキリスト教大学の大学院で経済学を専攻し、修士号を取得した。その頃に現在の高校から中国語を教える仕事のオファーがあり、勤務し始めた。同校の生徒は国語であるインドネシア語はもちろんのこと、英語も必修であり、その他に日本語、中国語、ドイツ語の中から1か国語を選択することになっている。同校の場合、卒業試験の外国語科目として日本語を設定しており、中国語を選択した生徒に関しては将来さらに継続して学習する者が集中的に学習するための基礎を作ることに重点が置かれている。中国語を選択した生徒は週に2時限(1単位時間は45分、但し金曜日にはイスラム教徒のための礼拝の時間があるため、1時限40分の短縮授業が行われている)の学習を行うが、3年間履修した時点での水準は、生徒たちのとの漢語による遣り取りのなかで初級の上ないし中級程度と判断された。

4) サラティガ市サティヤワチャナキリスト教大学付属中学・高校

中国語学科は2001年に設置された。同じ私学でも上記のキリスト教第一高校に比べて、授業料は月額35万～60万ルピアと高い。2009年の時点で約250人の中学生が中国語を学んでおり、中学の1年～3年まで3年間学び、高校では1年次のみ中国語を学んでいた。彼らをPatric Michael(呉仲漢)氏が1人で指導していた。呉仲漢氏はインドネシア国内の大学の学士課程では生物学を専攻したが、華人である彼の母親の勧めで中国の広東省にある暨南大学に1年間語学留学した。その後この付属中学・高校で生物を教えると同時に中国語の授業も担当するようになった。教材として使っていたのはインドネシアで編纂された『我的漢語』第1～第6冊である。同教材はもともと小学生用に編纂されたものであるが、初学者を対象とする教材であることから、呉氏は中学で使用していた。

5) スマラン市カラントリ (Karangturi) 高校

この学校は私立校であり、740人の生徒が通っており、教員数は50人、そのうちの2人が中国語担当の教員である。学校の歴史は古く、1929年7月1日にThe Sien Tjo氏をはじめとする華人有志の協力の下に「中華会学校」として発足した。1946年4月に同校は公立学校に改組され、現在の校名に変わったものである³²。この沿革からも推測されるように多くの華人生徒が通っており、中国語教育を学校の特徴として、生徒全員が中国語を履修している。その他の言語として英語は必修であり、課外の活動として日本語を学んでいる生徒もいる。上述した学校のランクを示す3つの指標のうち、この学校の場合には中レベルの「国家的」という位置づけがされている。ちなみに、中国語担当の教

員の1人は、学士課程はスマラン市にあるディアン・ヌスワントロ大学で3年間中国語を学んだ後、台湾の中原大学での1回の研修期間が1か月の語学研修を受けるために何度も台湾を訪れているという。

6) Sekolah Budi Utama (ブディ・ウタマ学校あるいは日惹崇徳三語国民学校)

「最高の理性」を意味する校名(Budi Utama)の同校がジョグジャカルタ市に2006年に創設された当初は幼稚園のみであり、在籍者は21人であったが、翌2007年に小学校部を設置し、19人を受け入れた。さらに2012年からは中学部も開設した。創設者のジャワティ氏は80代半ばの高齢にもかかわらず、将来中国語の分かるインドネシア人の必要性が高まることを予想し、インドネシアのために人材を養成したいとの思いから同校の創設に踏み切ったという。2012年現在の在籍者数は幼稚園172人、小学校274人、中学28人であり、教員数は幼稚園25人、小学校32人、中学10人(うち常勤は3人、非常勤は7人)である。中国語を教える教員は計5人であり、その内訳は、2人が小学校および中学で教え、3人が幼稚園で教えていた。中国語を教える教員5人のうち4人は大陸出身者であり、大陸の海外交流協会が派遣し、その給与も海外交流協会によって支給されていることに見られるように、中国政府による中国語の海外普及政策が強く働いていることを見て取れる。大陸出身の4人はいずれも広東省の出身であり、インドネシアに来る前には高級中学で語文の教員をしていたが、海外交流協会が海外で中国語を教える者を募集していた情報を見て、応募したものである。同じ頃に応募した仲間はタイやフィリピンで教えていた。地元採用のインドネシア人の中国語教員も2人いたが、彼らはいずれも中国で1~2年間の研修を受けてきていた。また、同校には台湾出身の中国語教員も1人いるが、大陸出身者と台湾出身の教員とはきわめて良好な人間関係の中で教えているという。

教材としてはシンガポールで編纂された新加坡教育部課程規画與發展署編『小学華文1~12』(教育出版社、2001~2006年刊)が使われており、12冊セットの同教材のうちの1冊、例えば1Aを1年かけて教えていた。聴き・話す内容は中国人教員が担当し、インドネシア人教員は作文を主として担当するという方法がとられていた。学校全体の教育はインドネシア教育省が定めたナショナル・カリキュラムに基づいて行われていた。その創設理念からも中国語教育にとくに力が入れられており、政府立の公立学校で中国語を教える場合には週当たり2時間であるが、この学校では週当たり7時間を中国語に配当していた。また、本校はインドネシア語、中国語、英語の3言語によるトリリンガル教育を売り物にしており、数学と理科は英語で教え、文化・芸術関連の科目は中国語で教えていた。授業料は月額70万~80万ルピアであるが、実際に徴収するのは35万ルピア~40万ルピアであり、残りは創設財団(ヤヤサン)が補助することになっている。

5. 質問紙調査結果から見た漢語学習に対する児童・生徒の意識

学校訪問や授業観察と平行して、漢語学習に対する児童・生徒の意識を明らかにするため質問紙調査も実施した。2010年および2012年に訪れたサラティガ市、スマラン市、ジョグジャカルタ市では、中国語とインドネシア語の両言語で作成した質問票を、筆者自身が担当教員の協力の下に各教室で配布し回収した。さらに、中部ジャワでもいっそう多くの華人・華僑が暮らし、在籍者の圧倒的多数を華人・華僑子弟が占めるような学校では、子どもたちの意識には違いが見られるのではないかという仮説の下、そうした学校での実態を調べるために、2013年12月にはスラバヤ市の小・中・高校(SMP Ciputra、SMP Pelangi Kritus、Intan Permata、SD Little Sun School)

表1 華人・華僑の子孫か否か

		華裔か否か		合計
		はい	いいえ	
スラバヤ	人数	306	41	347
	比率	88.2%	11.8%	100.0%
サラティガ	人数	246	244	490
	比率	50.2%	49.8%	100.0%
合計	人数	552	285	837
	比率	65.9%	34.1%	100.0%

で質問紙調査を追加実施した³³。これらの質問紙調査への回答者総数は 843 人であり、そのうちサラティガ、スマラン、ジョグジャカルタ（以下、「サラティガ」で代表させる）の回答者が 494 人、スラバヤの回答者が 349 人である。

最初に、これらの質問紙調査への回答者の属性について見ておく。学年を記入した 840 人について見ると、高校生が 499 人（59.2%）と半数強を占めた。次いで小学生が 229 人（27.2%）であり、中学生が 112 人（13.3%）と、高校生に偏ったサンプルになっている。性別に関しては、性別を記入した 829 人のうち、男子 390 人（47.0%）、女子 439 人（53.0%）とほぼ半々となっている。

回答者のエスニシティに関して、「あなたは華裔（華僑・華人の子孫）ですか」という質問に答えた者のうち、全体の 65.9%と、「はい」と答えた者が多いが、地域別に見ると、サラティガでは華人の血統を引く者とそれ以外とがほぼ拮抗しているのに対して、スラバヤでは 9 割近くと、圧倒的多数が華人系である。この華裔か否かと地域との関連を見ると、有意であることが確認された ($\chi^2=130.492$, $df=1$, $p<.001$)。ちなみに、上述したとおり、インドネシアの全人口に占める華人系住民の比率は 3% 前後であるのに対して、ジャワ東部は華人系住民の比率が高いことが知られている。スラバヤでは人口約 400 万人のうち、最多のジャワ人（53%）に次いで、華人（25.5%）、マドゥラ人（7.5%）、アラブ系住民（7%）、その他の諸民族（10%）という構成になっており³⁴、華人系住民の人口比率が高いが、とくに調査対象校では圧倒的多数が華人系児童・生徒である。以下の各項目の分析では、両地域の回答の比較対象および華裔か否かの比較を通じて、エスニシティと地域が華語教育の在り方に及ぼす影響について知見を得ることが可能となろう。

華裔か否かの問いと深く関わって「あなたの家や親戚の中に華語を日常的に使う人がいますか」という問いに対して、華裔か否かにかかわらず回答者全員の回答を見ると、サラティガでは肯定（248 人、50.5%）と否定（243 人、49.5%）がほとんど拮抗しているのに対して、スラバヤでは回答者の 81.9%の家庭に華語を使う

人がいるのであり、子どもたちは日常的により多く華語に触れる機会があるように見える。この問いに対する回答を両地域の華裔のみに限った結果が表 2 であり、地域別に家庭内での華語使用状況の関連を見ると、有意であることが確認された ($\chi^2=6.938$, $df=1$, $p<.01$)。

表 2. 家に華語を使用する人の有無 ($\chi^2=6.938$, $df=1$, $p<.01$)

		家に華語使用者あり		合計
		はい	いいえ	
スラバヤ	人数	262	43	305
	比率	85.9%	14.1%	100.0%
サラティガ	人数	190	56	246
	比率	77.2%	22.8%	100.0%
合計	人数	452	99	551
	比率	82.0%	18.0%	100.0%

外国語学習の中での漢語の位置を確認するための問い「あなたは漢語以外に学校で英語を学んでいますか」に対して、回答した総数 841 人のうちの圧倒的多数である 823 人（97.9%）が英語を学んでいると答えている。調査校では英語はほぼ必修になっているのである。両地域の華裔のみの回答を見ても、英語を学んでいる者の比率は、サラティガ 98.0%、スラバヤ 98.8%と、ほぼ同じである。

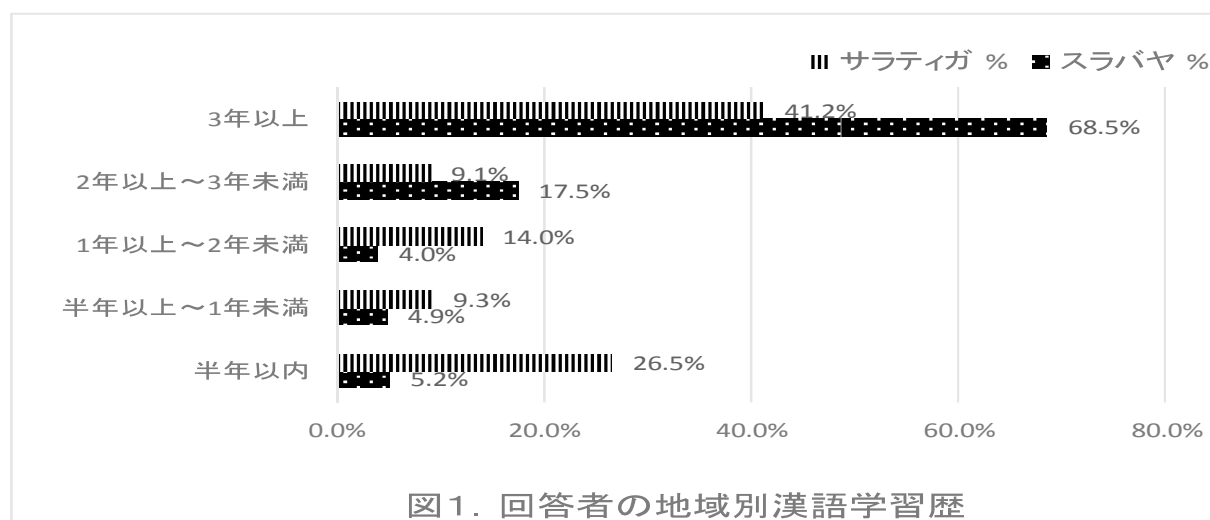
英語学習に関する問いに続いて「華語以外に（英語以外の）別の言語を学んでいますか」という問いに対して回答した 839 人のうち、他の言語を学んでいると答えたのは 260 人（31.0%）であり、579 人（69.0%）は他の言語を学んでいない。他の言語というのはドイツ語や課外に学ぶ場合も含めて日本語である。両地域の華裔のみに限って回答を見たのが表 3 であり、とくにスラバヤでは、半数近くの華裔が他の言語を学んでいると回答している。同地域の華裔の間では、漢語学習はもとより、他の言語の学習にも積極的な者が多いと見ることができよう。統計的にも有意であることが確認された ($\chi^2=53.561$, $df=1$, $p<.001$)。なお、インドネシア語や英語以外の言語の例として、サラティガ調査では 14 人が「ジャワ語」と具体的に記述した。標準語ないし国語としてのインドネシア語以外に地方語のジャワ語を学ぶことが、他言語の学習と捉えられている点は興味深い。

表3. 学校での他言語学習の有無 ($\chi^2=53.561, df=1, p<.001$)

		他言語学習の有無		合計
		はい	いいえ	
スラバヤ	人数	140	165	305
	比率	45.9%	54.1%	100.0%
サラティガ	人数	40	204	244
	比率	16.4%	83.6%	100.0%
合計	人数	180	369	549
	比率	32.8%	67.2%	100.0%

回答者の漢語学習歴を尋ねた質問に対する回答の分布は、半年以内147人(17.4%)、半年～1年未満62人(7.4%)、1年以上2年未満82人(9.8%)、2年以上3年未満105人(12.6%)、3

年以上439人(52.6%)と、回答者総数835人のうち半数以上が漢語を3年以上学んでいる。これを地域別に見たものが図1であり、スラバヤではとくに長期間にわたり漢語を学んでいる者の比率が68.5%と高い。一方、サラティガでは3年以上学んでいる者が42.1%に対して、26.5%が半年以内でまだ学習を始めて間もない生徒達である。

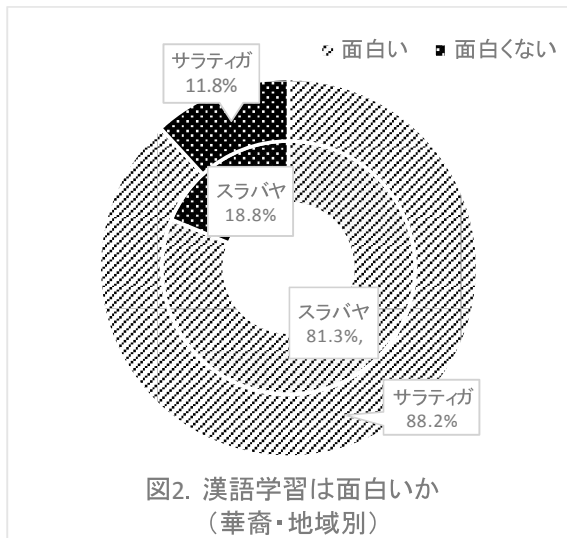


華裔回答者のみに限って漢語学習歴との関連を見たのが表4である。地域別に見たところ、華裔と華語の学習歴の関連は統計的に有意であることが確認された ($t=4.009, df=413.597, p<.001$)。

表4. 華人の血統を引く者の地域別漢語学習歴

		漢語学習歴					合計
		半年以内	半年以上～1年未満	1年以上～2年未満	2年以上～3年未満	3年以上	
スラバヤ	人数	9	16	12	54	215	306
	比率	2.9%	5.2%	3.9%	17.6%	70.3%	100.0%
サラティガ	人数	34	5	34	17	154	244
	比率	13.9%	2.0%	13.9%	7.0%	63.1%	100.0%
合計	人数	43	21	46	71	369	550
	比率	7.8%	3.8%	8.4%	12.9%	67.1%	100.0%

学習歴の長短はあるものの、漢語学習が「面白い」か否かを尋ねたところ、この質問に無回答の5人を除く838人中の726人(86.6%)と圧倒的多数が「面白い」と回答し、「面白くない」の112人(13.4%)を大きく上回った。但し、興味深いことに、図2に示すように、地域別に華裔に絞って見ると、スラバヤの華裔のほうが、より高い比率で「面白くない」と答えているのである。この地域別の華裔回答者と漢語学習を面白いと感じているか否かとの関連は、統計上有意であることが確認され



あったのに対して、難易度に関しては、「難しい」と感じている者（175人、50.7%）と「難しくない」と感じている者（170人、49.3%）がほぼ半々であった。一方、サラティガでは「難しい」と感じている者（309人、63.3%）が、「難しくない」と感じている者（179人、36.7%）を倍近く上回っているのである。つまり、漢語に相対的に馴染んでいる華人系住民が圧倒的に多いスラバヤの子どもたちにとって、学校での漢語学習はそれほど難しくはないが、彼らのニーズには合致しておらず、「面白い」と感じる者の比率が低くなっていることも解釈として考えられよう。ちなみに、スラバヤとサラティガの華裔のみに絞って漢語学習の難易を尋ねた結果が図3であり（ $\chi^2=27.971$, $df=1$, $p<.001$ ）、地域別に見た華裔の感じる漢語学習の難易には有意差が見られる。

ちなみに、漢語学習の領域別に見ても、「面白い」と感じることと難易には相関が見られるようである。「面白い」と感じることと「発音が難しい」との間では $r=-.140$ 、「文法が難しい」との間では $r=-.207$ 、「書き方が難しい」との間では $r=-.137$ （いずれも1%水準で有意）と、文法の難しさとの相関がいくぶん目立つ。逆に、「面白い」と感じることと「留学希望」との間には正の相関（ $r=.293$ 、1%水準で有意）が見られる。

発音、文法、文字の書き方の3領域に関して、「難しい」あるいは「難しくない」と感じている者の地域別人数と比率を示したのが表6である。なお、地域と漢語学習の各領域の困難さとの関連を見ると、それぞれ0.1%水準で有意であることが確認された。いずれの領域でもサラティガのほうがより「難しい」と感じる傾向が見られるが、これは学習期間の長短など別の要因が絡むこともあり、原因の特定は容易ではない。

た（ $\chi^2=4.908$, $df=1$, $p<.05$ ）。

「面白い」と感じることと漢語学習が「難しい」と感じることの間には、逆の関連が見られるのではないかと思われるが、回答者全員の状況は表5に示すとおりであり、 χ^2 検定の結果、有意であることが確認された（ $\chi^2=38.401$, $df=1$, $p<.001$ ）。また、全体として漢語を学ぶのが「難しい」と感じている者481人（58.0%）は、「難しくない」と答えた348人（42.0%）を上回っているが、地域的には意識に差が見られる。華人系の多いスラバヤでは、上記のように、漢語学習が「面白くない」と思う者の比率がサラティガに比べて高率で

表5. 漢語学習の面白さと難易のクロス

		漢語学習の難易		合計
		難しい	難しくない	
面白い	人数	388	332	720
	面白い の比率	53.9%	46.1%	100.0%
	難易 の比率	80.7%	95.4%	86.9%
面白くない	人数	93	16	109
	面白い の比率	85.3%	14.7%	100.0%
	難易 の比率	19.3%	4.6%	13.1%
合計	人数	481	348	829
	面白い の比率	58.0%	42.0%	100.0%
	難易 の比率%	100.0%	100.0%	100.0%

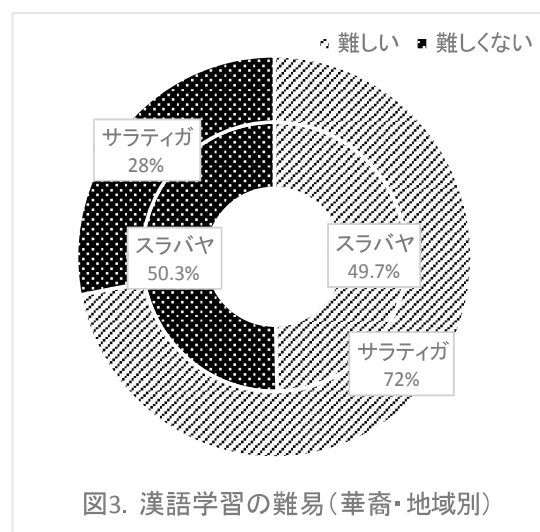


表 6. 地域別に見た漢語学習で難しく感じる領域

		発音 ($\chi^2=42.745, df=1, p<.001$)			文法 ($\chi^2=40.619, df=1, p<.001$)			書き方 ($\chi^2=23.147, df=1, p<.001$)		
		難しい	難しくない	合計	難しい	難しくない	合計	難しい	難しくない	合計
スラバヤ	人数	176	170	346	177	169	346	183	163	346
	比率	50.9%	49.1%	100.0%	51.2%	48.8%	100.0%	52.9%	47.1%	100.0%
サラティガ	人数	356	132	488	352	132	484	338	150	488
	比率	73.0%	27.0%	100.0%	72.7%	27.3%	100.0%	69.3%	30.7%	100.0%
合計	数	532	302	834	529	301	830	521	313	834
	比率	63.8%	36.2%	100.0%	63.7%	36.3%	100.0%	62.5%	37.5%	100.0%

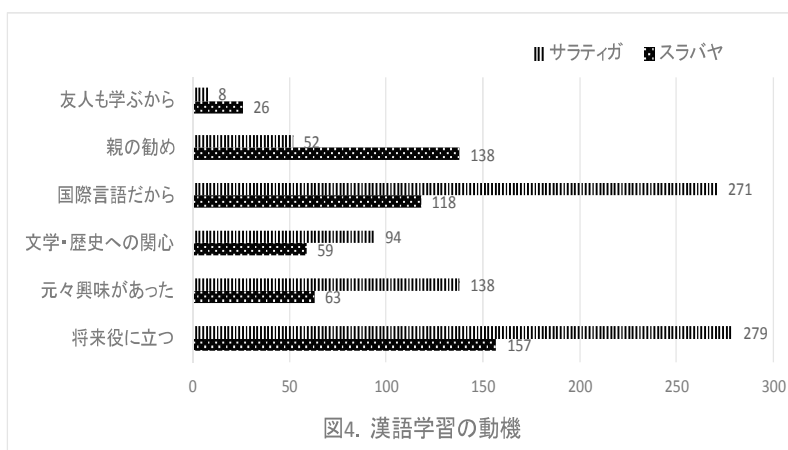
表 7. 華人の血統の有無と漢語学習で難しく感じる領域

			発音 ($\chi^2=4.794, df=1, p<.05$)			文法 ($\chi^2=5.111, df=1, p<.05$)			書き方 ($\chi^2=6.179, df=1, p<.05$)		
			難しい	難しくない	合計	難しい	難しくない	合計	難しい	難しくない	合計
華裔	はい	人数	336	213	549	334	213	547	328	221	549
		比率	61.2%	38.8%	100.0%	61.1%	38.9%	100.0%	59.7%	40.3%	100.0%
	いいえ	人数	193	87	280	192	86	278	192	88	280
		比率	68.9%	31.1%	100.0%	69.1%	30.9%	100.0%	68.6%	31.4%	100.0%
合計	人数	529	300	829	526	299	825	520	309	829	
	比率	63.8%	36.2%	100.0%	63.8%	36.2%	100.0%	62.7%	37.3%	100.0%	

表 7は、華人系か否かで、発音、文法、文字の書き方の何がとくに難しいと感じるかを探ったものである。いずれの領域も 5%水準で華裔か否かによって有意差が認められるが、上記の地域別の差のほうがより強く働いていると言える。しかしながら、いずれにしても、国民の 47%という圧倒的多数派の言語であったとはいえ余りに複雑なジャワ語ではなく、わずか 1.6%の者が使っていたマレー語がインドネシア国語 (Bahasa Indonesia) として選ばれた歴史を顧みると、声調言語 (tonal language) であり、漢字というアルファベットなどに比べればはるかに複雑な文字体系をもつ漢語は、習得の難しい言語である。とくに華裔以外

には難しいであろう。それゆえ、英語と漢語ないし中国語との外国語としての序列が逆転することは考えにくく、中国語が英語に取って代わることはないであろう³⁵。

本質問紙調査では、児童・生徒がどういった理由から漢語を学ぶようになったのかも尋ねた、その結果を示したのが図 4 である。漢語を学んでおけば「将来役に立つだろう」という現実主義的な認識を持っている子どもが多いことが分かる。それというのも漢語が英語に次ぐ国際的な言語だからという認識に裏打ちされているからであり、この 2つの理由がほぼ拮抗している。それ以外では、もともと漢語自体に漠然としたものであっても「興味があった」からとか、「中国の文化や歴史に関心があり」、それらにより深く接近する手段として漢語を学ぶという理由が比較的多くの者によって挙げられた。「親の勧め」によるとした者、「友人が漢語を選択して学んでいる」から自分も選択したという消極的理由を挙げた者は少なく、漢語学習はほぼ積極的な理由から行っていると考えられる。但し、スラバヤとサラティガとを比べると、「親の勧め」や「友人が選択していた」ことを理由に挙げた者が華人の多いスラバヤではサラティガよりも多いことが際立った特徴である。また、「親の勧め」によったことを漢語選択の理由として挙げた者について、華人の血を引く者か否かとの相関を見てみると、表 8 に示すように、華人の血統を引く者はそうでない者に比べて、「親の勧め」で漢語の学習を



「親の勧め」によるとした者、「友人が漢語を選択して学んでいる」から自分も選択したという消極的理由を挙げた者は少なく、漢語学習はほぼ積極的な理由から行っていると考えられる。但し、スラバヤとサラティガとを比べると、「親の勧め」や「友人が選択していた」ことを理由に挙げた者が華人の多いスラバヤではサラティガよりも多いことが際立った特徴である。また、「親の勧め」によったことを漢語選択の理由として挙げた者について、華人の血を引く者か否かとの相関を見てみると、表 8 に示すように、華人の血統を引く者はそうでない者に比べて、「親の勧め」で漢語の学習を

始めたケースが比較的多く、有意差が見られた ($\chi^2=52.712$, $df=1$, $p<.001$)。親世代の華語ないし漢語へのこだわりの表すものと言えるであろう。

さらに、華人の血統を引くか引かないかと漢語選択の種々の理由との関連に関して、統計上の有為な差 ($\chi^2=16.711$, $df=1$, $p<.001$) が見られたのは、表9に示す「漢語に対して元々興味・関心があつた」という理由である。興味深いことに、華人の血統を引かない者のほうが華裔に比べて、漢語に対して元々興味・関心を抱いていたことを示しているのである。

表8. 華人の血統の有無と漢語学習の理由（親の勧め）のクロス

		親の勧め		合計
		はい	いいえ	
華裔	人数	167	385	552
	比率	30.3%	69.7%	100.0%
非華裔	人数	23	262	285
	比率	8.1%	91.9%	100.0%
合計	人数	190	647	837
	比率	22.7%	77.3%	100.0%

華人の血統を引かない者のほうが華裔に比べて、漢語に対して元々興味・関心を抱いていたことを示しているのである。

表9. 華人の血統の有無と漢語学習の理由（元々興味有り）のクロス

		元々漢語に興味		合計
		はい	いいえ	
華裔	人数	108	444	552
	比率	19.6%	80.4%	100.0%
非華裔	人数	92	193	285
	比率	32.3%	67.7%	100.0%
合計	人数	200	637	837
	比率	23.9%	76.1%	100.0%

次に、「機会があれば、将来中国（台湾、香港を含む）に留学したいと思えますか」という問いに対して、表10に示すように、この質問に回答した829人のうち、「留学したい」と回答したのは約4分の3の623人であり、「留学したくない」と回答した者を大きく上回っている。中国、台湾、香港など中華世界に対する強い憧れを子ども達が持っていることが分かる。ただ、ここでも地域差が見られる。華人系がより多いスラバヤでは「留学したくない」が40%近く、サラティガの14.3%を大きく上回っており、この地域と留学希望の有無との関連を見ると、有意であることが確認された。

一方、華人の血統を引くか否かと留学希望との関連も5%水準で有意であることが確認できたが ($\chi^2=5.955$, $df=1$, $p<.05$)、表10に示す地域別ほど明確でない。そこでさらに、華人の血統を引く者だけに絞って、両地域の回答を見たのが表11であり、地域差のほうが留学希望の有無により強く働いているように見える。華人の血統を引く者であれば、父祖の地に強い愛着を当然抱くはずというような単純なことではないのであろう。華人とマジョリティであるプリブミという「両者の間に直接/間接の経験に基づく種々のネガティブなイメージが円環的に蓄積され続けている現代インドネシアの構造³⁶⁾」の下では、「華人であること」の意識やその表明は、かなり屈折したものになってもおかしくない。近年の東南アジアにおける中国のプレゼンスの増大に伴い、むしろ非華裔のほうが何のためらいもなく留学希望を表明しうる下地があるのかも知れない。例えば、サラティガに住む非華裔の回答者の1人は、「中国との交換留学の奨学金を得たいと

表10. 地域別に見た留学希望 ($\chi^2=69.883$, $df=1$, $p<.001$)

		留学希望の有無		合計
		はい	いいえ	
スラバヤ	人数	208	137	345
	比率	60.3%	39.7%	100.0%
サラティガ	人数	415	69	484
	比率	85.7%	14.3%	100.0%
合計	人数	623	206	829
	比率	75.2%	24.8%	100.0%

「中国との交換留学の奨学金を得たいと

表 11. 地域別に見た華裔の留学希望 ($\chi^2=23.925, df=1, p<.001$)

		留学希望の有無		合計
		はい	いいえ	
スラバヤ華裔	人数	194	108	302
	比率	64.2%	35.8%	100.0%
サラティガ華裔	人数	201	41	242
	比率	83.1%	16.9%	100.0%
合計	人数	395	149	544
	比率	72.6%	27.4%	100.0%

思っていることと、語学が好きで、中国の学校に行って見たいから」(16歳、男子)と自由記述欄に述べている。

華人の血統を引くかどうかを持つ意味をさらに探ってみるために、華人の血統を引く(華裔)かそうでないかと、漢語

学習の難易度についての意識、そして留学希望の有無とをクロスさせて見たのが表 12 である。どれほど漢語が難しくても華人の子孫であれば頑張って学習し留学を希望するということになるのではないかとの仮説である。しかし、結果は華人の血統を引く者のうち漢語学習が難しくないと考える者が留学を希望する傾向のみに有意な差が見られる。子どもに漢語学習を勧める親世代と違い、華人の血統を引く者の華語ないし漢語や自らのルーツへの憧れといったものは、長い漢語禁止の期間を経て、世代が下がると薄らいでしまったのかもしれない。むしろ、上述したとおり、華人の血統を引かない者のほうが却って、漢語は将来有用である」とか、「国際語としての中国語の意義」を捉えているようにも見えるのである。

表 12. 留学希望の有無と華裔・非華裔と漢語学習難易のクロス

漢語学習の難易			留学希望		合計
			あり	なし	
難しい	華裔	はい	人数 237	89	326
		華裔の比率	72.70%	27.30%	100.00%
	いいえ	人数	119	37	156
		華裔の比率	76.30%	23.70%	100.00%
	合計	人数	356	126	482
		華裔の比率	73.90%	26.10%	100.00%
難しくない	華裔	はい	人数 157	60	217
		華裔の比率	72.40%	27.60%	100.00%
	いいえ	人数	105	18	123
		華裔の比率	85.40%	14.60%	100.00%
	合計	人数	262	78	340
		華裔の比率	77.10%	22.90%	100.00%
合計	問D華裔	はい	人数 394	149	543
		華裔の比率	72.60%	27.40%	100.00%
	いいえ	人数	224	55	279
		華裔の比率	80.30%	19.70%	100.00%
	合計	人数	618	204	822
		華裔の比率	75.20%	24.80%	100.00%

($\chi^2=7.523, df=1, p<.01$)

しかしながら、そうした中であって、華人子孫としての思いを表現するかの如く、「私は中国人の子孫だからインドネシアにおいて中国文化を保持し、維持していくことができない」(15歳、女子、華裔、サラティガ)と、自由記述欄に記した者もいたことも確かである。

6. おわりに

以上、インドネシアにおける華裔・華人および華語・漢語教育が辿ってきた歴史を概観するとともに、華語・漢語に対する抑圧ないし使用禁止策が解かれた後の具体的変化について検討してきた。インドネシアで進められているのは華人の民族言語の教育として華語教育ではなく、あくまで外国語としての中国語を公教育のカリキュラムに取り込んでいくものである。そこでは、華人の血統を引く者のみならず、広くインドネシア人児童・生徒の間に漢語ないし中国語学習熱が高まる兆しを見ることが出来る。漢語を履修する児童・生徒の間には、質問紙調査を通じて、漢語に対する興味・関心の高

さや有用性に対するかなり強い意識を垣間見ることができた。一般にインドネシア人が英語を学ぶ動機が手段として (instrumental) であるとすれば、人々が漢語を学ぶ手段としての動機は、それが大いに高まっているとはいえ、英語の学習ほど強くはないだろうとされる。また、華人系のインドネシア人はインドネシアで生きていくためにはインドネシアの状況に適合する必要があると認識しており、彼らはむしろ英語に魅力を感じてきた。かつて華人系インドネシア人は主に中国からの移民一世で、広東語、潮州語など地方語も含めて漢語を話す新客、「トトツ (totok)」と現地生まれでインドネシア語を話す華人を意味する「プラナカン (peranakan)」とに大別された。しかし、今日では圧倒的多数がまったくのプラナカンか、地方語も含めて何らかの漢語も依然として話せるものの、混血などによりほぼ現地化したトトツ (peranakanized totok) であるという状況の下で、「もし現地化したトトツにとって漢語を学ぶのはアイデンティティに関わる事柄であるとすれば、他方プラナカンにとって漢語学習はあくまで手段なのである³⁷⁾」との解釈は説得力がある。

現地調査の過程で訪ねたジャカルタ市内で華人が経営する小さな書店には、多種多様な漢語教材・読み物がところ狭しと並んでいた。華語・漢語学習が解禁されて間もない時期のこうした状況は、長い空白期間を経て、ようやく自由に華語・漢語を学習できることへの高揚した雰囲気象徴しているようである。しかし、逆に未だ明確な基準がなく、試行錯誤が繰り返されている初期段階の、ある意味で混沌とした状態を示しているのかもしれない。実際の学校教育の現場で各種の教材が何年か試行的に使われた後、インドネシアの環境に真に適した教材や教授法が徐々に固まってくるのではなからうか。そうした過渡的な時期にあって、中国から派遣される漢語教育の専門家や教員、あるいは主として華人系インドネシア人を中国国内に受け入れて行われる漢語研修、さらに孔子学院や HSK 試験などを通じて中国政府が推し進める中国語・中国文化の対外普及政策の具体的措置が及ぼす影響は、確実にインドネシアの土壤に浸透していくのではないかと思われる。

(本稿は平成 26~28 年度 JSPS 科学研究費補助金基盤研究 (C) (一般) 課題番号 26381133 「中国の対外言語教育政策に関する研究—孔子学院の世界展開を中心に—」の研究成果の一部である。)

【注】

1 Suryadinata, L. "Nation-building and Nation-destroying: The Challenge of Globalization in Indonesia" in Suryadinata, L. (Ed.) Nationalism and Globalization: East and West, Institute of Southeast Asian Studies, 2000, p.60.

2 津田浩司『「華人性」の民族史—体制転換期インドネシアの地方都市のフィールドから—』世界思想社、2011年、11頁。

3 梁英明『東南亜華人研究—新世紀新視野—』香港社会科学出版社、2008年、130頁。

4 陳国華編『先駆者の脚印—海外華人教育三百年』Royal Kingsway Inc., Canada, 1992, 55頁。

5 梁英明、前掲書、132頁。

6 同上書、130頁。

7 周聿峨・陳雷「浅析印尼華文教育的復蘇及前景」『比較教育学研究』(中国比較教育研究会)、2003年第9期、82頁および文峰撰「華文教育」曹雲華・李皖南他編著『民主改革時期的印度尼西亚華人』暨南大学出版社、2014年、163頁。

8 梁英明、前掲書、132頁。

9 同上書、135頁。

10 同上書、139頁。

11 同上書、140頁。

12 唐慧『印度尼西亚歷屆政府華僑華人政策的形成與演變』世界知識出版社、2006年、15頁。

13 梁英明、前掲書、141頁。

14 周聿峨・陳雷「轉變中的印尼華文教育」

<http://www.lib.cuhk.edu.hk/conference/occ/zhouyue.pdf#search='转变中的印尼华文教育'> (2010年12月28日閲覧)

- 15 梁英明、前掲書、144～145 頁。
- 16 同上。
- 17 宗世海・李静「印尼華文教育的現状、問題及対策」『暨南大学華文学院学報』2004 年第 3 期、1～13 および 35 頁。
- 18 「国外漢語教学状況簡介」中国教育部ホームページ。http://www.edu.cn/20050721/3144267.shtml
- 19 「印尼四地漢語水平考試首次举行考生突破千人」
http://www.zaobao.com/chinese/region/indonesia/pages/indo_chinese181001.html。(2010 年 12 月 28 日 閲覧) 2002 年 10 月 26 日および 10 月 27 日にインドネシアで実施された第二回の漢語水準試験 (HSK) もジャカルタ、スラバヤ、バンドン、メダンで実施され、854 人が受験した(「印尼成功举行漢語水平考試」『華声報』2003 年 2 月 1 日、http://www.xmuoec.com/showarticle.aspx?article_id=115)。
- 20 文峰撰、前掲論文、172～173 頁。
- 21 「印尼教育部聘請漢語教育顧問」『華声報』2001 年 2 月 6 日。http://edu.sina.com.cn/s/19940.shtml (2010 年 12 月 28 日閲覧)
- 22 「印尼華文教育再現新生机」『星州日報』2001 年 7 月 25 日。
http://www.zaobao.com/chinese/region/indonesia/pages/indo_chinese250701.html
- 23 「印尼聘漢語教育顧問」『聯合早報』2003 年 6 月 16 日 (2010 年 12 月 28 日閲覧)
http://www.gdoverseaschn.com.cn/whhq/hwjy/200306160022.htm
- 24 周聿峨・陳雷「轉變中的印尼華文教育」http://edu.sina.com.cn/s/19940.shtml。漢語教育の人気の高まる中で、スマランにある私立ディアン・ヌスワントロ大学の言語・文学部では既設の中国語学科が 2010 年に廃止され、英語学科と日本語学科のみになった。
- 25 首藤もと子「インドネシアにおける中国援助—スラマドゥ橋とアチェの災害復興支援を中心に—」『Area Studies Tsukuba 33』2012 年、24～25 頁。
- 26 「孔院信息」(漢辦作成)の世界各国の孔子学院一覽資料による。
- 27 Budianta, M. “Diverse Voices: Indonesian Literature and Nation-building” in Lee, H. G. and Suryadinata, L. (eds.) *Language, Nation and Development in Southeast Asia*, Institute of Southeast Asian Studies, 2007, p.69.
- 28 北村由美『インドネシア創られゆく華人文化—民主化以降の表象をめぐって—』明石書店、2014 年、47 頁。この他、台湾の僑務委員会は 2007 年末時点でのインドネシア在住の華人人口を約 778 万人 (インドネシアの全人口の 3.4%) と推計しており、これは全地球上の海外華人数の 20% に当たり、インドネシアは世界最多の海外華人人口を抱える国であるとしている (僑務委員会編刊『中華民國九十七年僑務統計年報』2009 年、11 頁)。
- 29 宗世海、李静、前掲論文、1～13 および 35 頁。
- 30 同上。
- 31 2006 年の中等教育カリキュラムの改訂により、全ての普通高校及び宗教高校の高校生が、1 年次から 3 年間継続して第二外国語、又は技術・家庭のいずれか 1 科目を選択履修することになった。選択必修科目の第二外国語には、日本語、中国語、フランス語、ドイツ語及びアラビア語の 5 か国語があるが、何語を教えるかについては各校の裁量に委ねられている。
- 32 同校のホームページ http://www.karangturi.com/2010/?page_id=47 (2010 年 9 月 2 日閲覧)
- 33 スラバヤ市での調査に当たっては、調査校との連絡その他に関して、ジョグジャカルタ大学教育学部主任のアイリーン・アストゥティ (Siti Irene Astuti D.) 博士の協力を得た。付記して謝意を表したい。
- 34 スラバヤ市の広報文書 *People & Culture* による。
http://www.sparklingsurabaya.info/about-surabaya/people-a-culture (2014 年 12 月 25 日閲覧)
- 35 Julia Eka Rini, “Chinese Language in Indonesia: Its Position as a Foreign and Heritage Language” in *Chinese-Indonesians: Their Lives and Identities, Proceedings of International Conference on Chinese-Indonesian*, Institute for Research and Community Service, Petra Christian University, 2013, p.201.
- 36 津田浩司、前掲書、47 頁。
- 37 Julia Eka Rini, op.cit., p.196.